令和５年度第２回高知県子どもの環境づくり推進委員会　会議の概要

１　日程及び議題

日　　時：令和５年９月 10 日（日）　14:00～16:15

場　　所：高知県庁本庁舎２階 第二応接室

議　　題：（１）子ども条例フォーラムの開催内容について

（２）第１回子どもの環境づくり推進委員会におけるご意見への回答

（３）こども計画の策定に係る子どもの意見を聞く取組について

（４）子ども委員・OBOG による座談会について

知事と子ども委員・OBOG による座談会

テーマ「こどもたちに自分たちの住む町の暮らしや、

それに繋がる選挙に興味を持ってもらう方法」

２　会議の概要（委員からの主な意見）

事務局説明：（１）子ども条例フォーラムの開催内容について

資　　料：【資料１】【参考資料２】

●事業者から子ども条例フォーラムの開催内容について説明

○広報チラシの配布先はどこか。（委員）

○県内の高等学校、子ども食堂、図書館に配布予定であり、高等学校については、生徒数分を配布する。（事業者）

○アイスブレイクの絵しりとりとはどのようなものか。（委員）

○具体的な内容については、今後検討していくが、講師の意向によりディスカッショングループごとに実施する予定である。（事業者）

○公共交通機関を利用している隙間時間にポスターを目にすることがあると思う。そのような場での広報は計画されているか。（委員）

○バスや電車に掲載できるポスターには、サイズの指定がある。今回のポスターのサイズは該当しないため、掲載は考えていない。（事務局）

○ポスターのサイズを変更することは可能であるが、費用の兼ね合いもあるため検討する。（事業者）

○オフィシャルな学校から離れたところでも目にすることができたら良いと思う。イオンなどで広報いただくのはどうか。（委員）

事務局説明：（２）第１回子どもの環境づくり推進委員会におけるご意見への回答 資　　料：【資料２】

●事務局から第１回子どもの環境づくり推進委員会におけるご意見への回答について説明

事務局説明：（３）こども計画の策定に係る子どもの意見を聞く取組について 資　　料：【資料３】

●事務局からこども計画の策定に係る子どもの意見を聞く取組について説明

○スマホを持つ時期は人それぞれ違うため、学校など行く機会が多い場所にアンケートを設置するのが良いと思う。（委員）

○web アンケートを行う場合は、学校で活用しているクラスルームというアプリのようなものがあれば良いと思う。タブレットで回答できるようなものであると回答しやすい。（委員）

○資料 3-2「国や自治体に対して意見を伝えやすい方法」のアンケート結果によると、「web アンケートに答える」が「アンケート（紙）に答える」より高い傾向がある。ここから、いかに簡単に回答できるかということが一つのポイントになると思う。（委員）

○資料 3-2 のアンケートに回答している方たちは、それなりに積極性がある方であると思う。
自分に自信がない、積極性のあまりない子どもたちの意見を、どう拾いに行くか、また、子どもの生の声をいかに引き出すかということが大事になると思う。そのためには、信頼関係のある先生や大人に伝えられる方法があれば良いと思う。（委員）

○アンケートに答えることが意見を伝えることなのか。アンケートは、アンケートを作る側の俎上に載るのではないか。どんなふうに作るのか、どれくらい細かく聞くのかという段階から議論があっても良いと思う。（委員）

○資料 3-2「国や自治体に対して意見を伝えやすくなるための工夫やルール」のアンケート結果によ

ると、4番目に、「意見を伝える場に友人や知人と一緒に参加することができる」があげられていたが、質問内容に対する議論ができる場も必要ではないかと思う。（委員）

○現在、国において行っている取組としては、アンケートに限るわけではなく、当委員会のような、子どもが委員として就任する委員会を設置する方法、パブリックコメント的に情報を公開し、それについて意見をいただく方法、子どもたちによるモニター制度を用意して、そこで意見をいただく方法等、様々な方法をとっている。特に、先ほどご意見をいただいたように、消極的な方、意見を発する機会のない方の声をどのように拾っていくかは課題としている。
アンケートも一つの方法であると考えているが、今回は、アンケートに限らず幅広くご意見をいただきたい。（事務局）

○そもそも幼児期の子どもに直接アンケートすることはできないので、大人が関与せざるを得ないということはあると思う。（委員）

○こども大綱は、非常に幅広いものであるが、アンケートを実施する際、絞って聞くのか、網羅的に聞くのかというのも想像しにくい。また、小学校からタブレットが支給され、子どもたちは触りたがっている。タブレットを活用する際は、設問数などを工夫すれば回答が得られると思う。（委員）

○フリースクール等へのアプローチも必要であると思う。（委員）

○子どもの意見を聞くのはどの段階か。計画案を見て意見を伝えるのか、まっさらな状態で意見を伝えるのか。（委員）

○具体的な計画の段取りはこれからとなるため、本日はその前段階として、どういった方法が考えられるか、どういったところを注意していけば良いかといくことを幅広く議論いただきたい。（事務局）

○子どもからは大人が考えもしなかった意見や考えが出てくるので、計画案が出た時点で、決まったものに対しての意見を言うだけでなく、まっさらな状態で意見を聞くことも大切であると思う。（委員）

○段階的に子どもたちの意見を聞き、調整していくことも大切であると思う。（委員）

○段階的に意見が言える方が良いと思うが、意見を伝える過程で分からないことが出てくると思う。その際は、大人に助けを求められるようにして欲しい。（委員）

○このような委員会の場で意見を聞くというのも一つであると思う。本委員会は高校生が就任しているが、小学生や中学生が構成メンバーとされるものがあっても良いと思う。しかし、説明の仕方や問い方は高校生と小学生で同じではいけないと思うのでその点が難しいと思う。（委員）

○国においては、平仮名で分かりやすい表現にした資料を作成したりと工夫して行っている。どのような方法で意見を伺うかについては、委員よりいただいたご意見を参考に検討していく。（事務局）

事務局説明：（４）子ども委員・OBOG による座談会について テーマ「不登校のこどもたちの置かれている環境から考えるあったら良いと思う環境」 資　　料：【資料４】【参考資料１】

●事務局から子ども委員・OBOG による座談会について説明

○不登校について、知らないことばかりで驚くことが多かった。
その中で特に印象的だったことが、大阪で教師をされている OB の方がおっしゃっていた、大阪ではフリースクールが多く、家の近くにあるため通いやすい環境であるのに対し、高知県は、フリースクール同士が少し遠く、通いづらい状況にあるということだ。（委員）

○事前資料の中に、「休みたいと感じ始めてから実際に休み始めるまでの間に、どのようなことがあれば休まなかったと思うか（実際にあったことを含む）」というアンケートに対し、「学校にいるカウンセラーと話すこと」の割合は低く、「特になし」の割合が 50%を超えていた。ここから、学校にいるスクールカウンセラーの存在を知らない人がいるのではないかと感じた。（委員）

○不登校とは少し離れるが、中学校の夜間学校があるということに驚いた。中学校は義務教育であるため誰もが卒業できるが、学び直しができることや当時通えなかった人が中学校の雰囲気を感じることができるという点が良いと思った。（委員）

○スクールカウンセラーに相談するだけでなく、スクールカウンセラーより身近な存在であり、信頼できる先生に相談ができるということも大事であると感じた。（委員）

○実際、スクールカウンセラーには相談しにくいか。（委員）

○小学校の頃は、学校にスクールカウンセラーがおらず、中学校の頃は、３階に相談できる部屋があったが行きづらかった。また、毎日学校にいるわけではなく、関わる機会がなかった。（委員）

○不登校を経験した先輩と話をする機会があった。その際、「行かなかったことには後悔をしていないが、やれなかったことに後悔をしている」と言っていた。また、スクールカウンセラーに対しては、「うっとうしい、知らない人に自分の話をしたくない」と感じていたという。そして、自分が壊れる前に逃げることができる場所が必要であると感じた。その場所は、信頼できる先生、友達など多いほど良いと思う。（委員）

○先生へ自分から声をかけられる子どももいるが、そうでない子どももいる。先生から寄り添ってあげることも大切であると思う。（委員）

○スクールカウンセラーへ自分から相談できる子どもへの支援も大切だが、自分から声を上げられない子どもたちへどうアプローチしていくかという学校やスクールカウンセラーの姿勢が大切である。そこへの対策をしていかないと解決にはならないと思う。また、ある程度固定された段階での対応ではなく、早い段階での対応が必要であると考える。（委員）

○中学校では、1週間に1回スクールカウンセラーが学校に来て、授業の様子を見に行ったり、スクールカウンセラー便りを出して呼びかけをしているが、相談に行く生徒は決まっている。相談に行きにくい生徒が相談できるためには、信頼関係は非常に大事である。（委員）

○組織的に柔軟な対応をすると共に、信頼できる大人の関わりという両面での支援が必要であると改めて感じた。（委員）

○スクールカウンセラー等は継続していただくことが大切であると思う。確かに1週間に1回であっても、それが積み重なれば、「知ってる人」になっていく。（委員）

○スクールカウンセラーに直接相談することより、保健室に行くことが多いと思う。そこで、スクールカウンセラーや担任の先生など信頼できる大人にどう繋いでいくかということが大切であると思う。（委員）

○子どもたちは大人の様子を見ているし、気を遣っている。先生や職員が忙しそうと感じると遠慮することもある。子どもと関わる時間を増やすことで信頼関係が築かれると思う。（委員）

○保健室に行く子どもが多いということだが、その保健室が素敵な空間になればと思う。扉を開けると図書館に繋がるなど、ハード面での居場所作りができればと思う。（委員）

○信頼できる大人は、日常の自分を知ってくれていて、この人になら話してもいいと思える人であると思う。信頼できる大人になれる条件として、先生の配置基準など、政策的な見直しが必要ではないか。（委員）

○友達との関係を先生に相談したが、そのことを先生から注意すると逆効果となるため、友達には伝えないで欲しいという。先生も、目の届かない場所でのやりとりなど、やりにくい状況があると思うが、話を聞いてくれるということで気持ちが楽になることもあり、そういう大人がいてもいいと思う。（委員）

○毎日遠くから若者サポートステーションに通っている子がいる。職員としては、何か目標を立ててそれを明らかにするといったような支援を行っているが、それだけではなく、受け止めてあげて一緒に時間を過ごすということも大切であると改めて感じた。学校でミスマッチが起こっているのであれば、そういう子どもたちの声なき声を拾える場も大切にしたい。（委員）

○県立高校では年間２回程度、相談するとしたら誰にしたいか、悩み事はないかといったようなアンケートをしている。また、規模の小さい高校では、スクールカウンセラーが生徒全員と面談を行い、まずは存在を知ってもらい、何かあれば相談できる人として認識してもらうようにしている。（委員）

知事と子ども委員・OBOGによる座談会 テーマ「こどもたちに自分たちの住む町の暮らしや、 それに繋がる選挙に興味を持ってもらう方法」 資　　料：【資料４】【参考資料１】

●事務局から子ども委員・OBOGによる座談会について説明

〈子ども委員・OBOGによる座談会での意見交換内容について、各グループの代表者の報告〉

【Aグループ】

○このテーマを提案したのは、私である。理由は、友達同士で趣味の話をしたりすることはあるが、私たちに密接に関わりのある暮らしや選挙について話をする機会がなく、疑問に感じたからだ。（委員）

○興味を持ってもらう方法として、若い世代はインターネットの利用率が高く、使用時間も長いため、目に入る機会が高く、インターネットに焦点があたった。しかし、インターネットは、今までの傾向をもとに興味関心のある情報が提供されるようになっており、今まで触れてこなかった人たちに、届くのかという懸念が出てきた。（委員）

○また、インターネットで投票ができたり、投票したことをＳＮＳなどに投稿すると地域のお店で割引が受けられるといったような工夫があればよいのではという意見が出た。しかし、私は割引が受けられるということが目的となり、適当な投票が行われるのは好ましくないと思っている。（委員）

○そこで、全ての人が通る道である教育の場で、町の暮らしを知ることのできる機会があり、関心を持つ機会があることが重要ではないかという意見が出た。自分たちの未来に繋がるような教育をしていただきたいと思う。（委員）

○これらをする一つの方法として、幼い頃から意思決定ができる機会を家庭や教育の場で作っていくことが大切であるとOBOGの方から教えていただいた。（委員）

【Bグループ】

○地域の文化活動や体育活動などに参加することで、自分たちの町の暮らしや政治、選挙への関心につなげていくことができるのではないかという意見が出た。そして、そういった活動があることをみんなに知ってもらい、もっと身近に感じてもらうことが何よりも重要ではないかと考えた。実際に、そういう地域の活動の場に参加する若者が少ないこと、そして政治などへの若者の無関心さが問題になっている。子どもたちは無関心であっても、無関係ではいられない。大人たちの決めたことをこなしていくという社会づくりや教育制度に問題があるのではないか。興味があることに没頭する、疑問に思うことを追求する、不快に思うことをきちんと伝えるということが、自己決定につながり、社会参画にもつながっていくと思う。（委員）

○選挙前の学習の場として、学校には生徒会がある。しかし、その生徒会に所属している人でも意見が通りづらいと感じており、せっかく出た意見が、大人たちの判断でつぶされるという印象を持ってしまう。そうなると、次に意見を出そうという意欲がなくなり、他のことに挑戦する生徒が少なくなると思う。子どもたちの発言に対して、確かにそうかもしれないと思える大人の協力者が１人でも多くいること、大人が考える枠を広げること、子どもの意見を１人の人の意見として尊重し受けとめてあげることが重要ではないかという意見が出た。（委員）

○選挙に関しては、20代30代の人が投票しても、60歳以上の人口の半分も満たないと聞いた。若者の意見が反映されにくい現状なのではないか。若者は、マスコミの報道やインターネット、ＳＮＳ等で様々な情報を調べる機会がある。若者の意見を反映できる選挙制度を取っていかなければならないと感じた。（委員）

○幼い頃から、日常生活すべてが政治と繋がっているという意識を持てる環境や、意見の出し合いに

よって変化することを学ぶ機会、そして意見に耳を貸してくれる大人の存在が大切であると感じた。（委員）

〈意見交換〉

○地域活動に参加するというキーワードが出てきたが、かつて活動的であった地域も高齢化している現状がある。このような中で、高校生はどのようなことができそうか。（委員）

○介護の手助けができそうである。その際に、地域の話をしたり、子どもたちが知らない話を聞いたりと貴重な機会になると思う。（委員）

○選挙制度が変わり、18 歳から選挙権が与えられるようになった時期には、学校で模擬選挙がされていたが、最近はあまりされていないように感じる。意思決定をする経験が積み重ならないと、選挙へつながらないと思う。また、生徒会で意見が通りにくいという話があったが、通らない場合はその理由を伝えてあげることが必要であると思う。（委員）

○生徒会の選挙の際など、周りの友達に流されて投票している生徒が多いと思う。投票をしているが、それは自己決定ではないと思う。選挙が大事である理由を、生徒会の選挙を通じて学ぶ機会を設け、改めて説明することが大切であると思う。（委員）

○模擬選挙について学校で聞いたことはない。選挙制度が変わった際のポスターが未だに学校の玄関に貼られている。（委員）

○模擬選挙をしたことがない。学校では、生徒会の選挙があったが、皆が自分の意思でこの人がいいと投票しているようではなかった。自分で情報を集めて、照らし合わせ、選択していくということが弱い世代なのではないかと感じた。（OBOG）

○18 歳でいきなり選挙権が与えられても、実感がわかない。振り返ってみると、今まで選挙について学ぶ機会がなかったからであると思う。幼い頃から選挙の大切さを知ることができる教育が必要であると思う。（委員）

○政治をすごく簡単に言うとお金の配分の話だと思う。社会が何を大事にしていて、何にどれだけのお金を使ってるかということである。経済活動から解放されている子どもたちが、そこを実感するのは難しいと思う。その中でも、一番分かりやすいのは学校のことであると思う。（委員）

○選挙活動している人たちの言葉が伝わりづらい。例えば、「老人にやさしい」というフレーズでは、

「やさしい」の中身は何だろうと疑問に思う。18 歳の人たちに伝わっているのだろうかと感じる。（委員）

○私の学校では、生徒会の予算が的確に処理がされているかをプリントで配付され、見る機会がある。（委員）

○生徒会の選挙の際は、候補者がそれぞれ自分のしたいことを主張し、お互いの意見を比べて選んでいくという選挙のプロセスはあるのか。（知事）

○私の学校では、選挙の直前に候補者の方が全員 1 人ずつ自分の訴えかけたいこと伝えている。しかし、その際に自分が伝えたいことを先生に削除されてしまい、薄い内容になっている友達がいた。（委員）

○私の学校では、候補者がポスターやスピーチを LINE のノートに投稿し、皆に周知している。（委員）

○お昼の放送の時間に候補者が演説していた。数日に分けて演説を行っていたので、一日で全員の演説を聞くより伝わりやすかった。（委員）

○まず、「町の暮らし」や「選挙」についてのテーマを自分たちで設定し、意見を出し合っていることが頼もしいと思う。そして、生徒会の選挙については、様々な工夫がされており、選挙に向けての良いトレーニングになっていると感じた。また、娘の参観日でディベートをする授業を観たが、自分の意見とは反対の立場に立って議論をしたりと、こういった経験も訓練になっているのではないかと感じた。（知事）

○地域活動を通じて、関わりを持っていくことは私も大切であると思う。高校生の皆さんが大人とやりとりをするとなると、両親や学校の先生が主であり、地域住民とはあまり関わる機会がないのではないか。地域との関わりを増やしていくことは教育の面からも大切であると思っている。（知事）

○日本の社会全体が子どもを中心とする社会を目指していこうとしている。一方的に押し付けるのではなく、子どもと大人が双方向で意見交換をし、一つのビジョンを作ることができる社会を目指していきたいと思う。（知事）